

八木千代自選百句

秋

野



自

八

木

選

千

百

代

句

集

本書は、八木千代さんが作成された豆本「椿野」を、
本人の許諾を得て、電子化公開用に毎週web句会が
編集したものです。使われている字や1ページあたり
の句数は原本と同じです。



菜の花が咲いてる春に違くない

砦のように家のまわりに花咲かす

蛇口があつて時計があつてパンを焼く

朝までの不安に時計耐えてきた

花時計の根が水切れをしているよ

サーカスの絵が華やかなままほろぶ

ままごとは終つて破る紙の皿

蝶の絵の九十九枚は灰色に

さくらさくら炎えればほろぶほかはなし

砂時計しずかに沈む炎かな

眠り人形をゆすりつづけている少女

虹の影少女は虹と見てしまふ

少女から夏を攫ってゆく渚

触れられたことではじまる桃の傷

白桃の傷から視線そらせない

桃の皮逢うて死にたい人がある

このままの彩であじさい死をねがう

旅の町このままここに住めそうな

月の出よ祈りを盗む焙り絵よ

天の川よりゆらゆらと戻るなり

笹に吊すあさきゆめみし急ひもすと

逢うてきてから不規則な呼器吸器

カラスなぜ泣いたもうもう子は産めぬ

針山を四五日突いて女の忌

泣き通すのは水守りの吹く笛か

どの幕も笑い足りない立見席

うかうかとめくる真昼のプログラム

月は遙かに海は死ぬまで満たされぬ

ひきながらひきながら潮満たんとす

命終るその日まで抱く潮の音

一本杉の血がにじみだす月は中天

美しい血だな一本杉の血だな

月草草ようやく月を取戻す

逃げ水と影踏みごっこ鬼ごっこ

鬼たちも人間ごっこして遊ぶ

影踏みの鬼に踏まれてばかりいる

そのうちに鬼まで眠るかくれんぼ

父の闇兄の闇へと歩きだす

旅人と語るほとけは野を去らず

石仏の火の眼たらんと閉じ給う

同じ日に同じ火を吐くまんじゅしゃ華

朱き実を残す名もなき花の念

眠り人形の耳に木の実が落ちてきた

指人形母を笑わせてはやれる

人形の部屋に狼火の痕がある

いつになく激しく止める椿の木

隠し絵が重くて椿落ちてしまう

悲鳴抛りあげてふたたび椿の闇

忌のまえの十日に及ぶ火の指よ

狂いそうで秋の一樹にひざまずく

絵の女箱に入れると泣きじゃくる

日没がこわくてうたうカラスの子

山を見て秋の呼吸に戻るなり

稜線をみつめて痩せた指鳴らす

ひと彩の残る枯野の深さかな

水色の旗で枕を縫いましょう

サーカスの旗をたたんでいる女

秋風にふれて破れる昨日の絵

じっくりと風の噂を見ていよう

摺り鉢の底で漫画を画いている

神棚に詩集など置かないで下さい

棚の毒薬が少しずつ消える

清潔な壇に薬を入れましょう

朝ごとの眉をほとけにみつめられ

男は鬼に女はきつとゆうれいに

川上の霧は晴れたという噂

火を吐けば湖となるしかない火口

面の下の素顔も念のために塗る

マッチ箱眠ったふりも上手でしょ

蓋をしたピアノを風のまん中に

樹を倒す斧をいっぽん売りのこす

雨に彫れば面の目鼻も母に似る

どこで撞いても一ツしかない願いごと

この次に逢うのはきつと日溜まりで

泣きながら佇ってる塔もあるでしょう

三面鏡 三つ許せるまで磨く

月の弦 鉄の槌よりしたたかに

標的をしぼるとすれば月の弦

やがては闇に沈むにしても月の屋根

水甕があふれて朝を疑わぬ

わたしだけの木を植えて発つ秋の駅

からくりの箱を開ければ風ばかり

おとといの火から燃えだす紙人形

炎消せるまでいちまいの皿洗う

仮りの世の紅葉の下のおままごと

指千本折れば私も数になる

六十になると遊びの絵が画ける

人を逃がして縄の梯子もむらさきに

逃げるほど追手の数が増えてくる

雪を給う山肌の荒れいたわりて

隠し絵に昨日の雪が降りつづく

風が泣くので雪子の夢も微粒子に

旅の終りに誰と並んでいるだろう

引潮の沖から笑い声がする

結界へおぼろおぼろの落椿

落ちてから本音吐こうとする椿

境界線のところどころに椿の木

落椿 天は拍手をしてくれる

あらましは伝え終った新聞紙

ありふれた鳥が天まで辿り着く

